

60年代台湾文学

——「現代」と「郷土」——

白 先 勇

(池上貞子訳)

(訳者要約)

戦後台湾がようやく安定を見せはじめた時期、ちょうど高等教育を終えた世代が、国民党の文芸政策にあきたらず、新しい文学を追求した。それが1960年に創刊された雑誌『現代文学』に依拠するモダニズム文学運動で、それはまた遠くは「五四運動」の精神を受け継ぎ、近くは50年代台湾の現代詩運動の影響を受けている。これに係わった作家のなかで、今回は王文興、歐陽子、李昂について、やや詳しく論じた。また、当時から「郷土」という言葉が言われたが、それは70年代のイデオロギー的・政治的色彩を帯びたそれではなく、「台湾的現実」を直視するという意味合いであった。この方向性をもった作家として陳映真、黄春明をとりあげ、また「現代」と「郷土」の融合した例として、王禎和について論じた。かれらの文学は、文学技巧・思想内容ともに見るべきものがあり、台湾および中国の文学史のなかで一定の地位を与えられるべきである。

第1節 定義

ここで論じようとする60年代台湾文学とは、1960年から1970年までの10年間の文学作品を中心とするものであるが、台湾60年代の主要な文芸思潮である「現代主義(モダニズム)」文学運動は50年代の中ごろからすでにはじまり、70年代初めまでなお盛んであったので、本論でもいくつかこの時期の作品にふれることになる。本論でとりあげる「60年代作家」とは60年代に名が知られはじめた作家たちを指すが、かれらの70年代・80年代に至ってからの作品も、台湾文学界ではあいかわらずかなり大きな影響力をもっている。

本論では60年代台湾の小説を中心に論じ、現代詩については、紙面の都合上、概略のみにとどめる。

第2節 背景

1949年に国民政府が内戦に破れて台湾に移り、1950年の朝鮮戦争の勃発により「米華相互防衛条約」^{訳注1)}を締結した後、台湾島内の政局は安定にむかった。そこで国民政府は経済、教育、文化の建設に力をそそぎ、60年代になると、台湾は農業社会からしだいに工業商業社会へと転換して、ちょうどこのころ戦後第一世代も高等教育をおえた。台湾には新しい時代が訪れていた。新世代の作家はこのような気運のなかで生まれた。

国民政府が中国大陸30年代以降の左翼文学作品の出版を禁じていたため、「五四運動」の〈創新求変〉すなわち新しいものを創造し変化を求めるというロマン精神が、はるか彼方から台湾の新世代にむかって一貫してよびかけを行っていたもかかわらず、新時代の作家たちはイデオロ

ギー的に大陸の30年代の左翼文学運動とはほとんどつながりをもたなかった。

と同時に、これらの若い作家たちは当時、国民政府が提唱した「反共文学」や「健康的なリアリズム」という文芸路線に対して、不満を感じていた。それゆえ新しい文学を創造するということが、つまり芸術表現のうえで新しいスタイル、新しい様式をうちたて、思想的な視野において、台湾の新しい時代、新しい現実を反映させるという、この新しいものを創造しようという気概に富んだ文芸思潮が、当時の背景を異にする戦後第一代の青年作家たちの共通認識だった。これは20世紀中国文学史において「五四運動」につづく、二度めのモダニズム文学運動であり、この怒濤のような運動はまさに今世紀中期の台湾で発生したのだった。

第3節 「モダニズム」文学運動

1960年の雑誌『現代文学』^{訳注2)}の創刊は、台湾文学史のうえで重要な出来事だった。50年代にすでに、台湾ではいくつかの詩雑誌『現代詩』(1953)^{訳注3)}、『創世記』(1954)^{訳注4)}、『藍星』(1954)^{訳注5)}などが創刊されていて、台湾詩の現代化運動はすでにたいまつに火がともされていた。とりわけ1956年に紀弦^{訳注6)}が組織した「現代派」は、80名あまりの詩人が加盟し、勢いもすさまじく、台湾詩壇に大きな反響を巻き起こした。けれども台湾文学が60年代に新たな一ページを開いたことを、真の意味で象徴しているのは、『現代文学』の誕生である。この雑誌は、当時まだ台湾大学外文系に在学中だった学生たちによって創刊された。学生たちの背景はさまざままで、台湾に移り住んできた外省人二世もいれば、戦後に成長した本省人もいたし、海外から帰国した華僑もいた。けれども彼らはみな戦後の第一世代で、共通の教育を受け、似通った価値観をもっていた。『現代文学』創刊の辞のなかの、次のような言葉は、当時かれらが文学創作に対してどのような考えをもっていたかを表わしている。

われわれは、旧来の芸術様式やスタイルでは現代人たるわれわれの芸術的な感情を十分に表現できないと感じるに至った。そこでわれわれは新しい芸術様式とスタイルを試み模索し創造することを決意した。

われわれは伝統を重んじるが、むやみにそれを模倣したり、激しく排除したりすることはしない。ただし必要ならば、「破壊的建設」(Constructive Destruction)を行なうことはありうる。

創刊にかかわった王文興^{訳注7)}、欧陽子^{訳注8)}、陳若曦^{訳注9)}、白先勇のほかに、その頃しばしば『現代文学』に作品を発表していた作家として、王禎和^{訳注10)}、陳映真^{訳注11)}、黄春明^{訳注12)}、七等生^{訳注13)}、施叔青^{訳注14)}、李昂^{訳注15)}などがある。これら新進気鋭の作家たちはみなのに台湾文壇の中堅となり、彼らが60年代に発表した作品は、今日でもなお台湾の文学に対し、かなりの影響力をもっている。先に述べた現代詩の雑誌の重要な詩人たち、たとえば余光中^{訳注16)}、洛夫^{訳注17)}、周夢蝶^{訳注18)}、楊牧^{訳注19)}、鄭愁予^{訳注20)}、葉維廉^{訳注21)}、白萩^{訳注22)}なども、『現代文学』によく詩を載せてい

た。60年代中期に創刊した『笠』^{訳注23)}という詩のグループでも、その創刊にかかわった杜国清^{訳注24)}、陳千武(桓夫)などは、その初期の詩をみな『現代文学』に発表していた。該誌は台湾60年代に、これらの青年作家たちが自由に耕し、自分自身のスタイルを育てる田地を提供し、その後作家として大成するための基礎をつくった。『現代文学』は1960年から1973年までを前期とするが、この期間に、台湾60年代のもっとも才能のある、もっとも独創的なスタイルをもった作家が凝集している。

「五四」新文学運動と比較してみると、このふたつの文学運動には似通ったところがある。それは双方とも中国の政治社会の大変動を経たあとに生まれたものだという事だ。「五四」文学は「辛亥革命」により民国という新時代を築いたとき、そして60年代文学は共産主義革命により国民政府が台湾に移ったあとの泰平の時代に誕生している。また双方とも西洋文学の啓蒙を受けた青年作家たちが、当時の文芸気風に不満をもって、中国文学の現代的なスタイルを創造しようとして起こしたものである。

60年代作家が受けた西洋文学の影響は、基本的には、西洋の「現代主義」(Modernism)の作品がもとになっている。雑誌『現代文学』の大きな特長は、西洋モダニズムの重要な作家の作品と研究評論を系統的に翻訳紹介したことである。たとえばフランツ・カフカ、ジェームス・ジョイス、ヴァージニア・ウルフ、T. S. エリオットなどや、その他おおぜいの西洋モダニズムの巨匠たちである。若い作家の学識には限界があつて、たんに翻訳紹介ができただけだったが、これによって台湾文学界ははじめて大規模に西洋モダニズムの文学作品にふれたので、当時すくなくならぬ衝撃をあたえた。大切なのは、これらの青年作家たちがこうした西洋モダニズムの作品に触れ、啓発されて、独自のスタイルを備えた文学作品を創造するようになったことだ。これこそが中西文学交流の重要な成果である。

「五四」新文学運動とちがうのは、60年代台湾の青年作家たちは中国の伝統文化に対し、「五四」の先駆者のように徹底的に打倒しようという熱狂や革命への激情をもちあわせていなかったことだ。彼らは中国の伝統的な文学に対し、むしろ理性的に自省と選択をおこない、しかも中国の伝統文化と西洋の現代とを結合させようと考えた。それゆえ『現代文学』は中国の古典文学、とりわけ伝統小説に対しても、一連の見直しと批評をおこなった。

わたしはかつてある文章のなかで、台湾60年代の作家についてこう論評した¹⁾。

縦には中国五千年の重厚な文化遺産を継承し、横には欧米文化の強烈な攻撃を受けて、われわれは時まさに中国幾千年の文化伝統が空前の激変にむかう、あらしの時代に位置していた。

これらの作家たちは、心は重く、焦燥していた。内に向かつては、人生の基本的な存在意義を探そうとしていたが、これまでの価値観はかれらの人生信仰にとって、もはや唯一無二の参考とはなりえなくなっていた。かれらは伝統の廢墟の上でひとりひとりが孤独に、改めて自己の文化的価値観のとりでを築きあげなければならなかった。それゆえ一般的にこれらの作家たちの作風は、内省的で、探求的で、分析的であった。しかしながら外見は

という、その態度は誠実で、思いやり深かった。かれらは社会および社会のなかの個人に対して、誠実に気づかった。このような思いやりは、かならずしも「五四」時代の作家のように、社会を改革しようという熱狂によるのではなく、一種の同胞意識からくる、人間に対する同情と憐憫なのであった。

第4節 60年代台湾文学における「現代」と「郷土」

西洋の「モダニズム」は、基本的には、19世紀以来の西洋の中産階級がもっていた低俗な文化価値に対する、大きな反動なのである。文学においては、西洋の「モダニズム」作家は芸術様式の転覆と新たな創造をおこなった、当時の社会的価値に対して強烈な疑問をなげかけ、批判をおこなって、おおいに反逆した。60年代台湾の作家たちはこの文芸思潮に影響されて、小説の芸術様式と言語スタイルを新しく創造することに、これまでにないほどの執着心と情熱をいだいた。かれらのこうした芸術様式と文学スタイルも、作品における「モダン」の重要な要素だ。

ここで、何人かの作家を例にあげて説明する。

①王文興

王文興は『現代文学』の創始者のひとりである。彼が60年代に書いた短篇小説のなかには、彼が小説の言語に関して行なった、各種の実験のあとが顕著に見られる。彼は「五四」以来の新文学のなかの、白話文に対して強い不満をもっている。1973年、王文興の長編小説「家変」が出版され、台湾文学界をおおいに驚かせた。この小説で、王文興は中国語の文法と語句をしばしばねじまげ、ひっくりかえした。ときにはほとんど解読不可能のものもある。王文興はこの小説において、ジョイスの小説「ユリシーズ」と同じように、中国語の言語的実験を極限にまでおしすすめた。彼がこのような難渋な語句を創造したのは、もちろん小説「家変」のなかのきわめて複雑で難解な、解きたい父子の確執というテーマを表現するためだ。この小説は中国社会の父権の崩壊の寓話とみなすことができる。「寓話式」(Parabole)小説こそ、台湾60年代の作家が常用した様式である。かれらは30年代の中国作家の純粋なリアリズムから離反して、象徴の境界に足を踏み入れた。

②欧陽子

欧陽子も『現代文学』の創始者のひとりである。彼女が得意とするのは、心理分析小説だ。これは中国の近代小説のなかでは比較的例がすくない。台湾60年代作家のもうひとつの特色は、「外から内に向かう」ことである。30年代の作家が書いたのは、ほとんど外的な社会の変遷であるが、台湾60年代の作家は個人の内面の世界に重きをおいていた。欧陽子は比較的極端な例である。彼女の小説はほとんどみな人間の心の秘密を掘り起こすもので、小説の情景はすべて心理の平面に設えられている。彼女はきわめて純度の高い心理分析用語を作りあげるまでになった。文章の風格は冷静、理性的、客観的だ。小説様式も、じつにきびしく制御されている。けれども

冷静な言語と厳密な様式のなかで表現しようとしているのは、すべて人間の心の奥底にわきおこってくる、ありとあらゆる感情と欲望だ。男女間および家庭倫理の社会的タブーがことごとく、欧陽子によって心の奥底に潜むものまで、すこしの手加減も加えられずに暴露された。短篇小説集『秋葉』は彼女の代表作である。

③李昂

60年代、李昂がまだ若いころ、彼女はその作品のなかで男女関係に対する自らの強い関心と独特な見解とを表明した。『現代文学』に発表された一連の「鹿城物語」は、急速に崩壊しつつあった伝統社会のなかで、台湾女性がどのように自分の定位置を探しもとめていったのかという命題を、女性の視点からきびしく見つめている。李昂は早くから台湾フェミニズム小説の気風を開拓していたということが出来る。長編小説「夫殺し」は彼女の文学営為の最高峰であり、台湾フェミニズム小説の代表作でもある。李昂はこの小説のなかで、独創的な暗い暴力的なイメージに満ちた言語によって、人間性のなかのもっとも原始的な性の暴力が引き起こすところの破壊性を描きだしている。女性の見地から見れば、この小説は男性父権社会の崩壊を表わした、ひとつの寓話だとも言える。この小説は台湾文壇でも少なからぬ論議を巻きおこした。

「郷土」という言葉は、60年代と70年代後期では、台湾文学における意味がかなり異なる。70年代の「郷土文学論争」以後、「郷土」は明確なイデオロギーおよび政治的色彩を帯びるようになった。60年代の台湾文学においては、「郷土」はたんに漠然と「台湾的現実」を指すにすぎず、十分に明確な定義があったわけではない。しかもそれぞれの作家が「郷土」（という言葉）に対しそれぞれの解釈をすることが可能だった。60年代の台湾作家のなかで、本省人の子弟について言えば、彼らが直面した「台湾的現実」とは、その父親世代の日本統治時期とは、まったく異なる意味をもっていた。また外省人二世は台湾に対し新たなアイデンティティをもつようになり、台湾は彼らの新しい「郷土」となった。こうして彼らの父親世代の、大陸ですでに崩壊してしまったあの古い世界から、完全に遠くに離れた。これらのこともみなかれらの作品のなかに反映されている。ここでいくつか例をあげて、台湾60年代作家たちの「郷土」に対する解釈のしかたを説明する。

①陳映真

陳映真は60年代の重要な作家である。彼が『現代文学』に発表した短篇小説「將軍族」は台湾60年代文学の代表作のひとつだ。この小説は、台湾の養女と大陸からきた老兵の間の、胸をえぐるような悲劇を描いている。これは陳映真が台湾社会の底辺のふたりの人間を使って、外省人と本省人が台湾という島のなかで共同の運命を鑄造していくことを象徴させた寓話である——これもまた作者の目に映った「台湾的現実」である。陳映真は70年代の「郷土文学論争」において「郷土」派の側に立った主要な代弁者のひとりであるが、彼自身が60年代に発表した小説は、かなり明確な「モダニズム」の色彩をおびている。「將軍族」という小説は陳映真の典型的

な語調——詩情性と憂鬱な気分にあふれたそれを備えていて、日本の小説家芥川龍之介のあの痛ましく物悲しい調子に近い。大陸の批評家は陳映真のことを「台湾の憂鬱」と呼んだ。それはおそらく陳映真が台湾人の苦しみを描くのに優れているからであろう。彼が描く台湾人には、もちろん台湾生まれの外省人も含まれる。

②黄春明

黄春明は台湾 60 年代のもうひとりの重要な作家だ。彼は故郷宜蘭の庶民の物語を書くことで有名だ。『現代文学』に発表された「甘庚の黄昏」は黄春明の傑作だ。このきわめて短い物語は非常に力づくで日本統治時代の植民の歴史の傷の痛みを明らかにしてくれた。第二次世界大戦末期、台湾宜蘭の老いた農民である甘庚のひとり息子阿興が、日本軍に徴用され東南アジアの戦線送られたが、戻ったあと神経に異常をきたして白痴になってしまう。小説は甘庚が全身全霊をかたむけて白痴の息子の世話をするという、感動的な話を描いている。黄春明の筆によって、白痴の阿興は台湾人の苦難の象徴となった。台湾の植民の歴史も、これまた「台湾的現実」の一部なのである。

「郷土文学論争」以後、台湾文学界は長いあいだ一貫して「郷土」（土着志向）と「現代」（モダン）とを対立させ、「郷土」と「現代」を互いに排斥し合うもの、相容れないものとみなしてきた。実際には 60 年代の多くの台湾作家の作品のなかで、「郷土」と「現代」は共存し、「郷土」的な内容がしばしば「現代」的な技巧様式によって表現された。先に述べた李昂、陳映真、黄春明らの作品はほとんどこの特徴をそなえている。もうひとり 60 年代の重要な台湾の作家として王禎和がいる。彼の作品は「郷土」と「現代」の融合にみごとに成功した例だと言える。

王禎和は花蓮の出身で、彼の小説の多くは花蓮の土着の人物を主人公にしている。そのうえ彼は意図して台湾語を系統的に小説のなかに組み入れ、台湾語の諺をふんだんに使うことによって、小説のリアルな部分を増し、おおいに喜劇的な効果をあげている。だが、王禎和も台湾大学外文系の学生で、『現代文学』の編集作業にも参加したことがある。彼はかつて西洋の「モダニズム」、とりわけ西洋のモダン演劇や映画の研究に没頭したことがある。そのため、彼の作品のなかにも、意識の流れによる心理描写のような、さまざまな西洋の「モダニズム」文学の技巧が取り入れられた。

彼はそのもっとも有名な作品である「嫁粧一牛車」のなかで、モダニズムの技法を用いて、阿Q的な台湾土着の人物万発の形象化に成功している。王禎和の小説は「郷土」と「現代」がひとつに合わさっていて、その作品は「郷土」的であるとも、「現代」的であるとも言える。

第 5 節 結論

台湾 60 年代の作家は、根気よく芸術的な造詣を深めてきたし、思想的にも視野のうえでも新たな突破口を開いた。彼らの文学的成果は台湾文学史および中国現代文学史において、きちんと

した地位を与えられるべきである。

1999年、台湾の『聯合報』は「台湾文学名著」の選考を行い、大学で「現代文学」を講じている67名の教授による投票が行なわれた。選出された10冊の名著のうち7冊が60年代作家のものだった。これによっても、台湾文学界の60年代台湾文学に対する高い評価がうかがえる。

台湾大学中文系の柯慶明教授（彼自身かつて『現代文学』の編集を担当したことがある）は、台湾60年代の文学について論じた文章²⁾のなかで、60年代作家たちに対してこう結論づけている。

あのころ、大部分の作者はまだ若かったのではあるが、彼らの作品は芸術上の表現あるいは思想の深さ・幅広さから言っても、すでに単なる「試み」の段階を脱して、成熟の域にあった。

これは平和な年月のたまものであり、また古今内外もろもろの伝統的な資源を汲み取ることができたということもあって、当然、五四時期のように荒地を切り開いたり、抗日戦争時期のように困窮し流浪の身となるというようなことはなかった。広い視野をもち、なおかつ郷土の現実から出発するという立脚点を失わず、変化に富んだ技巧を適切に用いて、話に内容をもたせている。古い言葉で言うなら、まさに「文質彬彬」（文章、内容ともにすぐれている）というところだ。

これはかなり公平で妥当な評価である。

注

- 1) 白先勇 「『現代文学』的回顧与前瞻」『第六只手指』台北、爾雅出版社、1995年。
- 2) 柯慶明 「六十年代現代主義文学」『中国文学的美感』台北、麦田出版社、2000年。

訳注

- 1) 米華相互防衛条約：原文は「中米協防条約」。1954年締結。Sino-American Mutual Defense.
- 2) 『現代文学』：1960年創刊～73年51期で休刊。77年に復刊、84年22期まで。
- 3) 『現代詩』：1953年創刊の詩雑誌。59年停刊。紀弦、鄭愁予ら。モダニズム運動の火種。
- 4) 『創世記』：1954年創刊の詩雑誌。69年停刊。洛夫ら軍人など。民族色からモダニズムへ。
- 5) 『藍星』：1954年創刊の詩雑誌。覃子豪、余光中、楊牧ら。西洋化傾向批判。中国的風格。
- 6) 紀弦：1912～。河北生れ。30年代大陸で路易士の名で活躍。台湾現代派詩人の代表。在米。
- 7) 王文興：1939～。福建省出身。『現代文学』同人。モダニズム作家の中心的存在。在米。
- 8) 欧陽子：1939～。女性。南投の人。日本生れ。『現代文学』同人。近年は評論中心。在米。
- 9) 陳若曦：1938～。女性。台北県出身。『現代文学』同人。米国から中国大陸へ。在米。
- 10) 王禎和：1940～90。花蓮出身。郷土色の強い小説を書いたが、郷土作家のレッテルは嫌った。
- 11) 陳映真：1937～。竹南出身。郷土文学理論の開拓者。小説のほかに許南村の名で評論活動。
- 12) 黄春明：1939～。宜蘭生まれ。70年代郷土文学の代表的存在。庶民の代弁者と称される。
- 13) 七等星：1939～。苗栗出身。小説家。『文学季刊』『現代文学』に関わりつつ距離をおく。
- 14) 施叔青：1945～。女性。鹿港出身。演劇の造詣。香港に住み、一連の香港物語を書いた。
- 15) 李昂：1952～。女性。鹿港出身。日本でも「夫殺し」「迷いの園」など話題作で知られる。
- 16) 余光中：1928～。南京生まれ。詩人。『藍星』を創刊。郷土文学論争にかかわった。

- 17) 洛夫：1928～. 湖南出身. 詩人. 『創世記』同人. 超現実主義作風. 「詩魔」と称される.
- 18) 周夢蝶：1920～. 河南省出身. 『藍星』同人. 「苦行僧詩人」「孤独国王」の異名あり.
- 19) 楊牧：1940～. 花蓮出身. 詩人. 『現代文学』にもかかわる. 象徴詩が多い. 在米.
- 20) 鄭愁予：1933～. 済南生まれ. 詩人. 『現代文学』『創世記』に関わる. 在米.
- 21) 葉維廉：1937～. 広東出身. 詩人. 翻訳, 文芸理論も. 詩は難解と言われる. 在米.
- 22) 白萩：1937～. 台中出身. 詩人. 多くの詩社と関わり, 「現代」と「郷土」が融合.
- 23) 笠：台湾詩壇最大のグループ. 64年隔月詩刊『笠』を創刊. 林亨泰, 陳秀喜, 巫永福らも.
- 24) 杜国清：1941～. 台中出身. 詩人. 日本留学を経て米へ. 白氏と同じ大学で教鞭.
- 25) 陳千武：1922～. 台中出身. 詩人. 翻訳・小説家. 『笠』の中心的存在. 日本語訳多.